

令和 3 年 5 月 6 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2020

課題番号：16K01622

研究課題名（和文）附属学校との連携によるフェアプレイに注目した鬼ごっこの体育における実践と普及

研究課題名（英文）Development of a tag game in physical education enhancing generalization of fair play from gym to classroom

研究代表者

上野 耕平（Ueno, Kohei）

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：20311087

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：現代社会が体育に期待する事柄の一つとして、身体活動を通じて獲得したフェアプレイの日常生活への般化が挙げられる。そこで本研究では、フェアプレイの一つとして援助行動に注目し、援助自己効力感を促進する鬼遊びであるなかま鬼を体ほぐしの運動の教材として取り入れ、体育授業の実践を通じて、児童の援助自己効力感を高める体育授業を構築すると共に、その効果について検討することを目的とした。本学附属小学校との連携のもと実践研究を行った結果、小学校における体ほぐしの運動の教材としてなかま鬼を提示したほか、なかま鬼への参加を通じて援助行動を重ねることにより、児童の援助自己効力感が肯定的に変容することを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は体育授業を通じて参加者の人間形成を目指す実践研究であると言える。先行研究では、質問紙調査を通じて援助行動に影響を及ぼす可能性のある要因を推定する研究が多いなか、本研究は体育という限定された場面であっても、実際の具体的な行動による影響を確認する点が、他の研究と大きく異なっていた。本研究を通じて、体育において実施可能な援助行動を促進する鬼遊びの実施方法が明らかにされると共に、フェアプレイ（なかまを助ける）を促進する体育授業の具体例が提示された。また本研究の成果は、体育実践の現場及びスポーツ活動への参加を通じた人間形成に関する研究の一つとしても数えられるであろう。

研究成果の概要（英文）：Given the troublesome situation in some schools, people expect physical education (PE) to encourage students to generalize their fair play in sports from the gym to their classroom. This study focused on the helping behavior of students in a game of tag as one of the fair play methods. The purpose of this study was to develop a sports program in PE to enhance the generalization of helping behavior from the gym to their classrooms in cooperation with an affiliated elementary school.

Finally, a game of tag which is played as part of “Exercises for releasing the body and mind” in the PE curriculum and includes rules that require the children to engage in many helping and help-seeking behaviors was developed.

研究分野：体育心理学

キーワード：フェアプレイ 体ほぐし 鬼遊び スポーツマンシップ なかま鬼

### 1. 研究開始当初の背景

現代社会が体育に期待する事柄の一つとして、身体活動を通じて獲得したフェアプレイの日常生活への般化が挙げられる。例えば「ルールを守る」、「全力を出し切る」などの行動や「正々堂々と戦う」、「相手を思いやる」などの態度が日常生活にも反映されることが期待されていると言える。近年、学級崩壊やいじめ、引きこもりなどが社会問題となるなか、こうした社会的な態度の育成や道徳性の涵養といった役割が、これまでも増して学校での体育に求められている(友添, 2005)。

学校での体育において育成が期待される向社会的行動の一つとして援助行動がある。上野(2014)は、こうした援助行動が頻繁に行われる鬼遊び(なかま鬼)を開発した上で、鬼遊びに参加した小学2・3年生24名を対象として行った調査の結果、鬼遊びへの参加を通じて、学校生活場面において先生や仲間を助けることができるという予期である、援助自己効力感を高められる可能性が認められたと報告している。しかし、実際の体育授業におけるなかま鬼の実施方法及びその効果については、これまで明らかにされていなかった。

### 2. 研究の目的

本研究では、本学附属小学校との連携のもと、なかま鬼を体づくり運動系における体ほぐしの運動の教材として取り入れ、体育授業の実践を通じて、児童の援助自己効力感を高める体育授業を構築すると共に、その効果について検討することを目的とした。本目的を達成するために、以下の下位目標を立て、研究を行った。

#### (1) <研究1年目: 体育授業におけるなかま鬼の実践可能性の検討>

上野(2014)によるなかま鬼に関する実践研究は、運動あそび教室において実施されたものであり、小学校の体育授業場面への適用は残された研究課題であった。そこで研究1年目は、まず本学附属小学校との連携のもと、小学校の体育授業においてなかま鬼を実施する上での教材としての位置づけ、実施方法等について確認する。

#### (2) <研究2年目: 体育授業におけるなかま鬼の実践による効果の検討>

研究1年目の検討結果に基づき、実際の体育授業においてなかま鬼を実施しその効果について確認する。なお、援助自己効力感を測定する質問紙は低・中学年児童を対象としたものしか開発されていないことから、高学年児童を対象とした質問紙の開発についても目的に含める。また、援助自己効力感のほか、授業の雰囲気等多方面から、なかま鬼の実践による効果について明らかにする。

#### (3) <研究3年目: 他者評価によるなかま鬼の実践による効果の確認>

なかま鬼に参加する中で児童が経験している内容(例: たくさん人を助けた、たくさん助けられたなど)については、児童の主観的評価のみに基づいて行われてきた。しかし、実際に行われている援助行動・非援助経験との関係性については不明確である。そこで経験内容の主観的評価と共に実際の行動が援助自己効力感に及ぼす影響について確認する。

#### (4) <研究4・5年目: 援助行動の日常生活への般化可能性の確認及びなかま鬼の普及>

なかま鬼に参加する中で高まった援助自己効力感が日常生活場面における援助行動に結びつく可能性について確認する。その上で、なかま鬼の体育授業における実施方法について、広く普及させる。

### 3. 研究の方法

#### (1) <研究1年目: 体育授業におけるなかま鬼の実践可能性の検討>

上野(2014)が作成したなかま鬼について、本学附属小学校において体育科を研究対象とする教諭と教材化を図った。体育科の運動領域における位置づけ、一コマ内での指導案の構築、調査の実施方法について検討した上で、小学3年生2クラスの児童63名(男子26名、女子37名)を対象として授業を実施し、授業、調査の実施方法及び注意すべき点について検討した。

#### (2) <研究2年目: 体育授業におけるなかま鬼の実践による効果の検討>

まず、高学年児童用の援助自己効力感を測定する目的で、本学附属小学校に通う5年生児童62名(男子34名、女子28名)を対象として調査を行った。援助自己効力感尺度(低・中学年児童用)について、現職教員の意見をもとに表現に修正を加えた尺度を作成した。その上で、児童用社会的スキル尺度(石川・小林, 1998)、児童用共感測定尺度(桜井, 1986)及び、児童の過去1週間の援助頻度を問う質問と合わせてクラス単位で実施し、結果に基づき尺度の信頼性・妥当性について検証した。次に、体育授業におけるなかま鬼の実践による効果を検討する目的で、本学附属小学校5年生児童の内、なかま鬼及びしっぽ取りを実践する2回の授業に参加した児童60名(男子33名、女子27名)を調査対象者として、授業参加前後における援助自己効力感及び学級適応感の変容について確認した。

#### (3) <研究3年目: 他者評価によるなかま鬼の実践による効果の確認>

援助自己効力感の肯定的変容に影響を及ぼすなかま鬼参加中の経験内容を明らかにする目的で、公立小学校3年生児童の内、なかま鬼及びしっぽ取りを実践する2回の授業に参加した児童50名(男子23名、女子27名)を調査対象者として、授業参加前後における援助自己効力感の

変容に加えて、援助行動及び被援助経験に対する主観的評価について調査を行った。さらに、児童の援助行動及び被援助経験については、ビデオ映像を用いて実数を確認し、援助自己効力感に及ぼす影響について分析した。

(4) <研究4・5年目：援助行動の日常生活への般化可能性の確認及びなかま鬼の普及>

研究4年目の活動として、まずなかま鬼に参加する中で高まった援助自己効力感が日常生活場面における援助行動に結びつく可能性について確認する目的で、本学附属小学校3年生児童の内、なかま鬼を実践する体育授業に参加した児童29名(男子14名、女子15名)を調査対象者として、授業実施1週間前の平時、授業参加前後における援助自己効力感の変容について確認した。さらに授業終了後に、児童に対して「休み時間中の落ち葉拾い」への自発的参加を担任教諭から依頼した上で、その意思(援助意思)と実際の落ち葉拾いへの参加の有無(援助行動)を確認し、児童の援助自己効力感の高さとの関係性について試行的に分析した。

なお研究5年目については、新型コロナウイルス感染症の全国的な広がりに伴い、研究への協力を依頼していた本学附属小学校においても休校措置がとられたほか、その後も不要不急の活動については自粛が求められた。こうした状況から、学校並びに学級内への立ち入りを必要とする介入研究については、実施が困難となった。そこで研究目的をこれまでの研究成果のまとめに絞り実施した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 研究の主な成果

###### 体育授業におけるなかま鬼の教材化

なかま鬼を小学校体育科における教材とし、一例としてではあるが、その授業方法まで具体的に示すことができたことが挙げられる。本研究では、なかま鬼を小学校における体づくり運動系(体ほぐしの運動)の教材として用いた。

6人から8人程度の児童を1グループとし、学級の児童数に合わせて数グループを形成する。人数とグループ数を調整することにより、6人以上の学級であれば、規模に応じて対応できるようになっている。なかま鬼はバレーボールコート半面の空間を1つのグループが使用することから、多くの小学校では1つの体育館で4グループが同時に活動できると予想される。また鬼遊びは適度な運動強度があることから、休憩するグループも含めて、1分ほどの間隔で場所をローテーションしながら運動することで、十分な運動量が確保される。そして授業前半が終わった後に体や心の状態について振り返る時間を配置し、なかま鬼における援助行動や被援助経験の意味について、全体で共有する。さらに後半は、共有した内容をもとに活動することにより「友達を助けることができる嬉しさや楽しさ、友達に助けられる嬉しさや楽しさ」をより感じるができると考えられる。最後に「体育でお互いに助けあった友達を、次の授業でも助け合おう」と授業の終わりに呼びかけることにより、体育授業場面以外でも、お互いに友達を助け合うよう促すことができる。

なかま鬼の体ほぐしの運動としての効果については以下で説明するが、これまで確認している以外にも、多くの効果が期待できる活動であると考えられる。

###### なかま鬼への参加による心理的効果の実証

本学附属小学校に通う5年生児童60名(男子33名、女子27名)を対象として行った介入調査の結果、援助自己効力感に関して、なかま鬼実施前後の平均値の差が有意であり、実施前よりも実施後の方が高かったほか、なかま鬼実施後としば取り実施後の平均値の差が有意であり、しば取り実施後よりもなかま鬼実施後の方が高かった(表1)。さらに学校適応感を構成する居心地の良さの感覚に関して、調査時期の主効果が有意であり実施前よりも実施後の平均値の方が高かったほか、交互作用についても有意傾向が認められた(表2)。これらの結果から、なかま鬼への参加を通じて児童の援助自己効力感は肯定的に変容すること、さらに児童のクラスにおける居心地の良さの感覚についても、肯定的に変容する可能性があることが明らかになった。

さらに公立小学校に通う3年生児童50名(男子23名、女子27名)を対象として行った介入調査の結果、なかま鬼はしば取りと比較して、援助・被援助行動の主観的評価が高く、間接的援助を除く援助行動・被援助行動の実数においても、多いことを示す結果が得られた(表3)。他方、なかま鬼実施前の援助自己効力感、援助・被援助行動に対する主観的評価に加え、援助・被援助行動の各実数を独立変数、なかま鬼実施後の援助自己効力感を従属変数としてステップワイズ法による重回帰分析(変数増加法)を行った結果、重回帰モデルは有意であり( $F(2,47) = 61.54$ , 調整済 $R^2 = .71$ ,  $p < .01$ )、なかま鬼実施前の援助自己効力感( $\beta = .79$ ,  $t = 9.92$ ,  $p < .01$ )及び、なかま鬼参加中に行った援助行動に対する主観的評価( $\beta = .17$ ,  $t = 2.12$ ,  $p < .05$ )が、なかま鬼実施後の援助自己効力感を規定することを示す結果が得られた。本結果から、なかま鬼実施後の援助自己効力感は、援助行動の実数よりも援助行動に対する主観的評価によって説明されることが明らかになった。

以上の結果から、なかま鬼には多くの援助行動及び被援助経験の機会が含まれており、なかま鬼への参加を通じて「たくさん助けた、たくさん助けられた」といった援助行動や被援助経験に対する主観的評価が高まることにより、学校生活場面においても他の児童を助けることができるだろうという予期(援助自己効力感)を高めるのではないかと考えられた。

表1 援助自己効力感に関する分散分析の結果

		鬼遊び前		鬼遊び後		交互作用	主効果		単純主効果	$\eta^2$
		Mean	SD	Mean	SD		時期	種類		
援助自己効力感	しっぽ取り	4.19	1.30	4.05	1.46	9.29 **	.43	1.94	なかま鬼前 < なかま鬼後 *	.05
	なかま鬼	4.10	1.32	4.33	1.30	.15	.01	.04	しっぽ取り後 < なかま鬼後 **	.07

交互作用・主効果：上段F値，下段 $\eta^2$  \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

表2 居心地の良さの感覚に関する分散分析の結果

		鬼遊び前		鬼遊び後		交互作用	主効果	
		Mean	SD	Mean	SD		時期	種類
居心地の良さの感覚	しっぽ取り	3.13	.87	3.46	1.01	3.29 †	25.66 ***	1.21
	なかま鬼	3.12	.79	3.61	.89	.03	.75	.02

交互作用・主効果：上段F値，下段 $\eta^2$  \*\*\*  $p < .001$ , † .05  $p < .10$

表3 援助・被援助行動に関するt検定の結果

	なかま鬼		しっぽ取り		t値	d
	Mean	SD	Mean	SD		
援助行動に対する主観的評価	3.18	.69	1.86	1.03	8.82 **	1.51
被援助行動に対する主観的評価	3.08	.75	1.68	.77	10.96 **	1.84
積極的援助	7.78	6.28	.06	.31	8.62 **	1.74
消極的援助	2.54	2.48	.06	.31	6.88 **	1.40
間接的援助	.40	.64	.26	.72	1.04	.21
直接的被援助	5.04	3.19	.00	.00	11.16 **	2.24
互惠的被援助	23.54	10.00	.00	.00	16.64 **	3.33
強制的被援助	.94	1.42	.00	.00	4.68 **	.94
間接的被援助	.10	.30	.00	.00	2.33 *	.47
援助行動の総数	10.72	7.38	.32	.96	9.84 **	1.98
被援助行動の総数	29.62	9.76	.32	.96	21.22 **	4.23

df=49

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$  (両側検定)

(2) 得られた成果の国内外における位置づけ

本研究は体育授業を通じて参加者の人間形成を目指す実践研究であると言える。先行研究では、質問紙調査を通じて援助行動に影響を及ぼす可能性のある要因を推定する研究が多いなか、

本研究は体育という限定された場面であっても、実際の具体的な行動による影響を確認する点が、他の研究と大きく異なっていた。本研究を通じて、体育において実施可能な援助行動を促進する鬼遊びの実施方法が明らかにされると共に、フェアプレイ（なかまを助ける）を促進する体育授業の具体例が提示された。また本研究の成果は、体育実践の現場及びスポーツ活動への参加を通じた人間形成に関する研究の一つとしても数えられるであろう。

国外において鬼遊び（tag game）を対象とした研究は見当たらないが、海外での研究発表時には、フェアプレイの般化を促す鬼遊びとして多くの研究者が関心を示してくれた。スポーツの価値が勝利に大きく偏るなか、体育授業への参加を通じた人間形成の効果を示す本研究の成果は、スポーツや運動の価値を示す上で重要な結果の一つとなると考えられる。

### （3）今後の展望

上述したとおり、本研究については、新型コロナウイルス感染症の全国的な広がりに伴い、研究5年目に予定していた介入研究が実施できなかった。研究4年目に実施した試行的な介入研究において、なかま鬼に参加する中で高まった援助自己効力感が日常生活場面における具体的な援助行動に結びつくことについて確認するための手続きを、研究方法に取り込む上で大きな困難を抱えた。どのような方法を用いれば、援助自己効力感が具体的な行動に結びつくことを確認できるのかについて、引き続き検討する必要がある。

他方、体育授業で高まった援助自己効力感を実際に日常生活場面で行動として表出させることにより、援助行動は定着していくと考えられる。従って、そうした場面を用意することは効果の検証のためだけに限らず、援助行動を定着させる上でも重要であると考えられる。他の研究者や領域のアイデアを取り入れることにより、こうした課題について解決を図る必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Kohei Ueno	4. 巻 8
2. 論文標題 The Effect of Participation in a Game of Tag, an Activity Promoting Helping Behavior, on Children's Helping Behavior-Related Self-Efficacy	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Advances in Physical Education	6. 最初と最後の頁 238-245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4236/ape.2018.82021	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 上野耕平	4. 巻 151
2. 論文標題 なかま鬼における援助行動が児童の援助自己効力感に及ぼす影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 香川大学教育学部研究報告第1部	6. 最初と最後の頁 91-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 上野耕平	4. 巻 148
2. 論文標題 運動遊びにおける援助経験が児童の援助自己効力感に及ぼす影響	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 香川大学教育学部研究報告第 部	6. 最初と最後の頁 57-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 上野耕平ほか14名	4. 巻 36
2. 論文標題 児童の援助行動に注目した鬼遊びの体育授業における実践	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 香川大学教育実践総合研究	6. 最初と最後の頁 33-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Kohei Ueno
2. 発表標題 Types of helping behaviors observed in a tag game that promotes children's helping behavior-related self-efficacy
3. 学会等名 15th European Congress of Sport and Exercise Psychology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kohei Ueno
2. 発表標題 The Impact of Participation in a Game of Tag, an Activity Promoting Helping Behavior, on Helping Behavior-Related Self-efficacy and Subjective Adjustment to the Classroom among Children
3. 学会等名 23rd Annual Congress of the European College of Sport Science. Dublin, Ireland (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上野耕平
2. 発表標題 援助行動を促進する鬼遊びへの参加が児童の援助自己効力感及び学級適応感に及ぼす影響
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kohei UENO
2. 発表標題 Development of a tag game to improve children's helping behavior-related self-efficacy
3. 学会等名 International Society of Sport Psychology 14th World Congress Sevilla 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 上野耕平, 山神真一, 石川雄一, 野崎武司, 宮本賢作, 米村耕平, 山西達也, 前場裕平, 大西美輪, 山路晃代, 山本健太, 増田一仁, 倉山佳子, 三宅健司, 石川敦子
2. 発表標題 児童の援助行動に注目した鬼ごっこの体育授業における実践
3. 学会等名 平成28年度香川大学教育学部・附属学校園教員合同研究集会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関